

池田健太郎

わが
読書
雑記

中央公論社

池田健太郎

わが読書雑記

中央公論社



わが読書雜記

定価一六五〇円

昭和五十五年十月二十日印刷
昭和五十五年十一月七日發行

著者 池田健太郎

發行者 高梨 茂

印刷所 三晃印刷

發行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ八ノ七

振替東京二二三四

校印磨正

©一九八〇

目次

I

神西清の翻訳

*

鳴海完造氏のこと

偉大なる書痴・鳴海完造

II

詩人プーシキン

プーシキンと文化・文政

詩人・プーシキン像を求めて

論集『プーシキンとその同時代人たち』を見る

*

広津和郎におけるチエーホフの問題

「昨日」の芸術家チエーホフ

72 55

44 40 37 35

21 17

9

劇中のチェーホフ——劇について——

「哲学する」登場人物

チェーホフ劇のいのち

福田さんとチェーホフ

チェーホフの滑稽小説

『かもめ』台本作成のこと

ある『かもめ』評釈

『評釈』雑感

チェーホフ世界の読み

*

ロシア文学の流れを読む

ロシア文学研究の現状について

III

白樺とロシア作家

ドストエフスキイの旅

ドストエフスキイ生誕百五十年祭に出席して

モスクワだより

スプーミにて

132 150 145 142 137

125 119

115 112 108 104 98 92 90 87 81

ドストエフスキイの国——生誕百五十年祭に訪ッして——

IV

翻訳仕事から——学んだものと失ったもの——

わたしの外国語

観心寺再訪

机辺にて

V

閉戸読書の記

小林秀雄氏のドストエフスキイ

『神皇正統記』を読む

鷗外の史伝に感じたこと

VI

カエデの芽生え

おつむ談義

『創作ノート』

わたしの好きなことば

ふと気がつく

わたしの発奮

荷風日記をひらいて

母のころ

「かわいい顔して……」

後記にかえて

川端香男里

318

315 311 310 308 307

わが読書雑記

I

神西清の翻訳

神西清は、昭和三十年代まで麗筆をふるった、文人翻訳者の最後のひとりであった。このような文人翻訳者は、今日ではほとんど見られないし、今後も恐らく見られないだろう。外国文学を受容するわが国の精神風土がまた、文人翻訳者の存在価値をしだいに希薄にしている。今や文人翻訳者に代わって、専門研究者の時代である。専門研究という言葉の意味をたずねることを別にすれば。だが、その為に文人翻訳者の高貴な価値がいささかたりとも失われるものではない。事實はむしろその逆とさえ言えよう。私たちが二葉亭四迷、森鷗外の訳業を精神文化の土壌のなかにはぐくんでいるように、私たちはやがて神西清の訳業をわが国の文化遺産の一つとして認識することだろう。神西清の翻訳は、そのような質的な価値を持っているのである。

神西清は、詩人、作家としては生前はなばなしい成功に恵まれなかった。詩は詩人として多少つまみすぎる美徳の為に籬底きそふかく秘められ、小説は生涯こまやかな交友を結んだ堀辰雄の名声の蔭にかくれて異彩を放つことがなかった。同時代の識者の誰もが神西清の名を語り、神西清を天性の詩人、作家、文学者と認めていたにもかかわらず、はなばなしい成功はついに神西清の手のうちになかった。その深い理由を神西清の作品と時代のなかに立ち入ってたずねる積りは私

にはない。私には到底できもしないことなのだ。だがそれでは神西清は文学者として不遇だったのだろうか。神西清は文人翻訳者としての成功しか約束されていなかったのだろうか。私はそうは思わない。神西清が訳業において広く世間に認められ、文字どおりの意味で一世を風靡したのが昭和二十七年、昭和二十九年であるとするならば、神西清は創作において大いなる結晶を見せるべく余生があまりにも短かすぎたところ言えるのである。神西清が世を去ったのは昭和三十二年、早春であった。

岩波文庫のこの一冊とともに、文人翻訳者・神西清の生涯と仕事の概略を書き留めておこう。これは神西清の死後、百合夫人が手ずから編んだ神西清年譜をもとに、私がまとめたものである。神西清は明治三十六年、東京に生まれた。東京府立四中（現在の戸山高校）に入学、そこで竹山道雄氏とともに学ぶ。ついで第一高等学校（東大教養学部）理科にはいり、寮生活のあいだに堀辰雄と知り合い、生涯の友となる。フランス象徴派の詩を耽読し、自身詩作にふける。その後十年ほどのあいだに書き溜められた詩は、死後、福永武彦氏の手で『神西清詩集』（東京創元社）一巻に編まれた。大正十四年、第一高等学校を中退して、東京外国語学校（東京外国語大学）露語部に転学、その頃、竹山道雄、堀辰雄らとともに同人雑誌「虹」を興し、やがて旧「山繭」同人（石丸重治、河上徹太郎ら）に合併する。昭和三年、北海道帝国大学図書館に勤務し、小説『恢復期』を書きはじめ、昭和五年、雑誌「文学」（第一書房）に発表。これが晩年までに書かれた数多くの小説、戯曲、評論などの事実上の処女作となった。

神西清ははじめて翻訳を世に出したのは、昭和七、八年頃と考えられる。この頃、神西清は三

度目の勤務先であるソ連通商部を退職し、文筆生活にはいつていたが、チェーホフ『犬を連れた奥さん』、ツルゲーネフ『散文詩』、プーシキン『スベードの女王』、ジイド『田園交響楽』などを訳出した。ジイドの『田園交響楽』は、最初たしか堀辰雄と共訳であり、のちに改訳されて神西清ひとりの訳業となった。またこの時に初訳されたチェーホフ、ツルゲーネフ、プーシキンの諸作が、のちにこれも改訳されて岩波文庫に加えられたのは今日知られているとおりである。

その後、神西清は企画院に、また戦時中は東亜研究所に籍を置きながら、地味で綿密な創作と翻訳に骨身をけずった。創作では巧みな『垂水』、『孤独者』、『見守る女』につづいて中篇『母たち』が書かれ、翻訳では『チェーホフの手帖』、擬古文によるバルザック『こんとどろらていく』(数篇のみ)、ガルシンの短篇、ドストエフスキ『永遠の夫』、シャルドンヌ『愛をめぐる随想』、レスコーフ『僧院の人々』が訳出され、また評伝『ドストエフスキの生涯と作品』が書かれた。神西清の翻訳はその精密さ、流麗さで衆に拔きんで、昭和十一年にはガルシンなどの翻訳で早くも池谷賞を受賞するほど識者に鑑賞されていた。

神西清が創作に、評論に、翻訳に八面六臂の活躍ぶりを見せたのは、終戦後である。この時、神西清は四十二歳であった。終戦の翌年には、応仁の乱に取材した連歌師貞阿の物語『雪の宿り』(『文藝』)、青年時代の外国商館勤務の記憶にもとづく『灰色の眼の女』(『思索』)を発表し、つづいて『聖痕』(『八雲』)、『白樺のある風景』(『別冊文藝春秋』)、『ローザムンデ舞曲』(『群像』)、『遁走変奏曲』(『群像』)、坂上郎女に関する『母の秋』(『フェミナ』)、『船首像』(『思索』)、『梵音』(『個性』)、『ハビアン説法』(『朝日評論』)、『月見座頭』(『別冊文藝春秋』)などを矢つぎ早に雑誌に掲載した。また朝日新聞に文芸時評を連載し、昭和二十八年、堀辰雄の死にあたっては堀辰雄全

集刊行（新潮社）の為に編集に没頭した。福田恆存、大岡昇平、三島由紀夫、吉田健一、中村光夫氏らの鉢の木会に加わったのもこの頃である。

こうした創作意欲の高まりの合間に、神西清はシャルドンス『ロマネスク』、レスコーフ『真珠の首飾り 他二篇』、ツルゲーネフ『はつ恋』などを訳出したが、神西清の翻訳がその名声の頂点に到達したのは、昭和二十七年、文学座公演の為に訳出したチェーホフ『ワーニャ伯父さん』であり、神西清はこの翻訳によって文部大臣賞を受けた。神西清によるこの『ワーニャ伯父さん』の翻訳は、わが国の新劇界の一つの事件であった。文学座公演を演出した久保田万太郎は、「戯曲の翻訳は、あなたによっては一線を劃されました」と書いている。ついで昭和二十九年は、翻訳者としての神西清が最も多忙を極めた年であった。まず岸田国士演出の文学座公演の為にゴリキイ『どん底』を訳しあげると、河出書房の為にチェーホフ『桜の園』、『三人姉妹』、『かもめ』、『熊』を訳出し、また『チェーホフ試論』を「文藝」の為に書きあげた。

神西清が舌癌の為に闘病生活にはいったのは、あくる昭和三十年の秋からであった。「毒舌を吐きすぎたので舌をちょん切られます」こんな洒落を私信に書いているが、この難病はついに神西清の命取りになった。闘病のあいだに、小説『貞節なる女帝』（別冊文藝春秋）を書き、ツルゲーネフ『けむり』を訳出し、また中央公論社の為に個人訳チェーホフ全集の翻訳に心を砕いたが、昭和三十二年三月十一日、五十三歳の生涯を惜しまれて閉じた。

「翻訳者は原作の裏切者である」——こんな言い古された言葉を神西清は随想『旧訳と新訳』のなかで書きもし、また座談の折など口に出して語ってもいたが、自身「翻訳者は裏切者である」

とは信じていなかった。それどころか、十九世紀はじめのロシアの名訳者ジュコーフスキイと同様に、神西清は翻訳を責任のある文学の仕事と確信していたようにさえ見える。多くの作家が一時期、異国の作品の翻訳に従事して、たといそれが生計の爲であるにしても、その仕事から文章の修練、原作者の作意の細かい把握など何らかの糧を得たことはわが国においても外国の文学においても周知の事実であるが、神西清は自身創作の筆を執りながらひとたび翻訳に向かうと、一字一句ゆるがせにできない精神的緊張の状態に自らを置かないではいらなかった。これは意識的な努力というよりも性格的な、むしろ生理的な神西清の特性と言つてよい。私は青年時代ふとした事から神西清の篤い数々の恩顧にあずかつて、何度か神西清の翻訳仕事の机の傍に身を固くして坐っていたことがある。神西清はよく似合う和服の袖からかなり長いパイプを取り出してその先にピースを差し込むと火をつけ、左肘を机について人差指と中指をやや内側に曲げ気味にパイプを持ち、原稿紙に向かう。その瞬間、部屋の空気がびりりと震えて引き締まるのが、若い私の体感じられる。神西清は針の先ほどの隙をも見逃がさぬ厳しい蒼白な顔で原書を睨み、大らかな美しい書体で原稿紙に半行、時には四、五字を書きつける。それから再び原書に目を移し、すでに書き埋めた原稿紙を一枚二枚とめくって今までの訳文を読み返し、しばらく虚空を睨みながら再び原稿紙にわずかな言葉を書きつける。私はその作業を美しいと思ったことを、昨日の事のように記憶している。神西清の遅筆ゆえに編集者泣かせと言われた翻訳の作業は、こういう驚くべき緻密な、半行書く為に一枚二枚前から訳文を読み返す丹念な反覆によってなされていたのである。福田恆存氏が神西清を偲ぶ文章のなかで、神西清は仕事に取りかかる前に数時間ある時は数日間、机の前に端坐して、鉛筆、ペン、紙切り、文鎮など小道具を並べ直していたというよ

うな意味のことを書いていたのを覚えているが、この空白の時間は神西清が丹念で根氣よい反覆作業を行なう為に必要な充電の時間だったと言えるだろう。

神西清が和漢洋の博覧強記の人であったことは、すでに掲げた略歴が雄弁に物語っている。訳書そのものでさえ露仏英の三国の作物に及んでいたが、一方わが国の文学に対しては現代・近代作家は言うに及ばず、古典文学の造詣も極めて深かった。評論・随想集をひもどいて見ると、堀辰雄、芥川龍之介、太宰治、三島由紀夫を論じ、鏡花、鵲外、荷風らについて語り、遠く日記、万葉の世界にもわけ入っていることが知られる。創作の幾篇かは歴史に取材されてさえいる。この奥深い学殖は、もちろん専門研究者のそれとは異なり、この点では神西清が独擅場としたロシア文学の学殖も同様であるが、神西清は専門研究者に容易に把握することのできない文学の本質を見事に言い当てている。それは時代と国ぶりこそ違え、作家と作家とが通じあう無言の感応と呼ぶことができるかも知れない。例えば、『詩人プーシキン』と題して、『預言者』、『記念碑』という名高いロシア詩聖の二篇の詩を翻訳しつつ物静かに語った神西清の短かい随想は、専門研究者の長い論文よりもプーシキンがどんなに偉大な詩人であったかをありありと読者に納得させるのである。神西清が東西古今の作物にわけ入りながら求めたものは美であり、博覧強記と奥深い学殖を挙げて創作に翻訳に彫心鏤骨の苦心を払いつつ求めたものもまた美であったのだと言うことができる。

神西清の翻訳は一読して知られるとおり異常なまでの美意識に貫かれ、訳語の選択、文章の区切り方、勢い、陰影、雰囲気の醸成などに細かい気の配り方が見られるが、この神西清の美意識はしばしば現代日本語の乱れに対する憤懣となって現われた。折口信夫、三好達治らと詩歌につ